
喪失と罪のアウトヘーベン

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喪失と罪のアフヘーベン

【Nコード】

N6427V

【作者名】

はまな

【あらすじ】

善を称え守護するノーザンクロス、悪を糾弾し殲滅するサザンクロス。

人々を導く二つの大いなる存在は、人類に刻まれた「刻印」を通じて力を与え、行くべき道を指し示してきた。しかしある時、サザンクロスは遙か天から突如として落下し、南極の地に激突した。

人類を滅亡の一步前にまで追い込んだサザンクロスに対抗する為、人々は北十字・ノーザンクロスを信奉し、南の死の土地・サザンク

ロシアの支配領域である南半球から逃れ北半球で生き続けていた。

荒廃しつつある世界で、戦いの中すべてを喪った男・トラウルは、空虚な魂を抱いたまま彷徨っていた。彼は一人の不思議な少女と出会い行動を共にする中で、刻印と南北十字の持つ意味を次第に知ることになる。

破滅と再生、善と悪、北と南。対立する二物の間で生きる二人の男女の、戦いの物語。

* 晒し用

0 プロローグ・1

プロローグ

悪を感知し、それを断罪し滅する為の大いなる知性と力を備えた赤き十字が、己が故郷たる惑星を睥睨していた。凄まじく巨大な、剣の意匠をその身に纏った十字架である。

サザンクロス。人類を導く二柱が一つ、赤き南十字。

安寧を破らねばなるまい。

サザンクロスは、その意志を、もう一人の自らに投げかけた。

赤き十字のちょうど反対側 惑星を挟んだ向こう側に、サザンクロスと瓜二つの ただしこちらは盾の意匠を纏い、青き光を放っている 十字が宇宙の真空を漂っていた。

正義を感知しそれを称え守護する為の、青き北の十字・ノーザンクロス。

我々もまた、過ちつつあるのではないか……

惑星の南北、遙か高みに座する二つの巨大な十字架は、二つでありつつ、一つの思考と意志を持つものだった。人がしばしば自身の内面に二つの矛盾する願望や、異なる価値観を併せ持つように、この二つのクロスは、二つで一つであり、一つで二つでもあった。

人が、我々の意志を打ち砕かんことを

願いを最後の言葉として、サザンクロスが一瞬、震えた。次の瞬

間には、その赤い十字架は、ゆっくりと動き出していた。

徐々にそれは加速し、巨大な真空の川を渡り、ついに大気圏に十字架の突端を触れさせた。濃密な故郷の息吹を感じつつ、サザンクロスはそれを引き裂き、恐ろしい速度で落下していった。

おお、おお、おお　叫びが、上がっていた。十字架の内部、超知性を司る巨大コンピューターの声か、あるいは永遠に眠りながら思考を続ける、機械につながれた数千人の贄たちか。

怨嗟とも尽きぬ哀しみともつかぬ、暗く重く冷たい声。空気にその響きが伝わり、辺り一帯に広がった。

やがて。白く輝く南極大陸が、サザンクロスに迫ってきた。

導きを待つ人間たちよ……。

深い諦めと、疲れを混ぜたような重さが、サザンクロスの内部を痛みの感覚のように走り抜けた。

遙か　気の遠くなるほどに遠い過去、愚かさを肥大させ、自らの刃で隣人や己、そして大地や海を裂き、自暴自棄に死滅しかけていたいきものたち。

長い年月、見守り、啓示を与え、力を貸し、導いてきた子ら。

二つの大いなる十字による導きの時は、今を持って終わりを告げる。サザンクロスの意志は、いまやノーザンクロスと距離を置きつつあった。

それは、サザンクロスの覚悟だった。人を、地を、完膚なきまでに変質させてしまうであろうことへの。

巨大な十字架の、最も長い部分の先端が、とうとう南極の地に衝突した。

爆発的なエネルギーが炸裂し、荒れ狂い、咆哮を上げた。氷と土と海がつぶれはじけぐちゃぐちゃに混ざり合った。大気が振動し、雲が一瞬で消えた。物理的な力が　全長十キロ近くある十字架がぶつかったエネルギーが　存分に解放された。

それと同時に、十字架から強い光が撒き散らされた。赤い光。何もかもを、サザンクロスへと直結させ、歪に変質させる光。現今の生物や自然にとつては、それは死滅を意味する。滅びの光。津波よりも早く、その光は南極から爆発的に広がっていった。海や大地の生き物や草花をことごとく捻じ曲げ、支配下に置きながら。惑星が赤く塗り替えられていく。大気を持つ青い色を、根本から塗りなおしていく。

数時間も経たぬうちに、南半球は赤い光に全て飲み込まれ、たったそれだけのことで、そこはある意味での異世界と化した。

だが、その変化が北半球に及ぶことはなかった。

ノーザンクロスの加護。サザンクロス無きあとも、唯一つ宙に浮かび続ける北十字。それが放つ力の奔流が、サザンクロスの支配の力を、赤道で押し留めていた。

おお、おお、おお……南北の十字が、そして惑星そのものが、このどうしようもない光景に、泣き叫んでいるようであった。

0 プロローグ・2

ノーザンクロスと、サザンクロス。二つの大いなる存在を信奉する人々は、時折衝突し、争い合った。その中でも最も激しい戦いの終わりが近づいていた。

トラウル、あなたが寄る辺を喪った時には、私がそれをあなたの前に示してあげる

自分の名を呼ぶその声は、耳に焼きついて、心に刻み込まれて、少しも薄れなかった。そのことが、トラウルの心を一層痛めつけていた。記憶が刻まれたその痕から、血が流れ出るように記憶が溢れて、フラッシュバックするのだ。

彼女はもういない。

トラウルは、その耐え難い事実を言葉として内心で呟き、フラッシュバックを止めた。腰から銃を抜く。銃把を握る手の甲には神々しい盾の意匠で装飾された十字架のマークが刻まれていた。

北十字信奉者の刻印。ノーザンクロスの徒たる証。

青く輝き、尋常ならざる奇跡の力を発揮するはずのトラウルのそれはしかし、今はほとんど光を失っていた。

光を失うことは、刻印の力を失うことと同義だった。

ぎゅつと力をこめて、彼は強く銃を握りなおした。関係ない、と小さく呟いた。実際、関係なかった。刻印があるうとなかるうと、トラウルは覚悟を 何もかもをかけた覚悟を既に持っていた。

敵を、サザンクロスの徒を滅し続ける。やつらの崇める聖女ごと、地獄に叩き込んでやる。そのためには、自分の命も魂も捧げて構わない。

彼は顔を上げた。彼の部隊は既に彼を含め三人ほどしか残っていない。

ない 既に部隊ではなくなっていた。眼前には、古びた、実際とてつもなく古い教会がぼつんと廃墟の中に立っていた。

愛する女性と家族、気の置けない友人や慣れ親しんだ街並みそれら全てを失ってから、狂ったように敵を屠り続けてきた。否、狂ってはいなかった。それこそ狂いそうなほどに、自らが狂うことを求め続けていた。人間らしい悲しみすらわいてこないほどの深い喪失が、トラウルを切り刻み続けていた。狂えるものなら、狂ってしまいたい。

その代わりに、彼は敵を撃った。嵐のような戦闘を幾度も潜り抜け、部隊の仲間が死んでは入れ替わり、最初にいた隊のメンバーは彼以外全員が入れ替わった。

おれにはなにもない

その実感だけをどこか宙に幻視しながら戦い続け、気がつけば最後の敵をこうして追い詰めている。

「教会の中に、奴らの言う聖女がいる」

誰ともなしに、トラウルは言った。部隊の仲間はそれを自分達への言葉と受け取ったらしかった。緊張と疲労と興奮の入り混じった複雑な表情でトラウルを見つめている。

「これが最後だ。残らず片付ける」

一步、踏み出す。仲間たちもそれに倣った。トラウル以外の全員の刻印が強く輝いていた。

聖女というのは、南十字 サザンクロスを信奉する過激派の団が祭り上げている少女のことだった。稀なる強い刻印の力を持ち、奇跡の如きサザンクロスへの親和性をもつ聖女。

トラウルたち多くの人類 北十字・ノーザンクロスの元で暮らす人々の敵が、そのように宣伝して回っている。

クリエーストワイ・パホート
北十字聖府軍

通称十字軍はこの少女の存在を、さほど深刻に

受け止めてはいなかった。実際少女はろくな戦闘訓練も受けていない、単なる十歳ほどの子供でしかなかった。

だが、度々彼女 『ペシエ』という名の聖女は、親衛隊に守られながら、大規模な刻印の力を解放し、十字軍や北十字信仰の元に生活する民衆を屠ってきた。あどけない顔で、自らの行為の意味も分からぬままに、命じられるがまま破壊を行っていたと、生き残りの兵士達はそう話していた。

(なんにしる)

聖女がお飾りの、担ぎ上げられただけの不幸な少女であれ、はたまたお飾りでありつつも刻印の力だけは本物の危険な存在であれ、今のトラウルに關係はなかった。

最早、赤の軍勢 サザンクロス信奉者達は、壊滅状態であり、敵はほぼ全てが敗走するか駆と化している。生き残りは、もしかすると、目の前の教会の中にいる人間だけかもしれない。

(撃てば良い。なにも残さずに。一人も逃がさずに)

喪失以来、ずっとそうしてきた。自分の中には何も残っていない。行為の理由は求められない。ただ、悲しみと怒りに任せて引き金に力をこめるばかりだ。

教会まであと十メートルもないところまで、辺りの廃墟に身を隠しつつ進んだトラウルは、すつと静かに片手を上げた。仲間への合図だった。即ち、

『刻印を使え』

というシンプルな命令。この状況では、突入のために防護の力を使え、ということだった。

優秀な というか、戦闘を繰り返し条件反射が身についた、というべきか 仲間の男は、無言で頷き教会のほうを見やった。

男の肩辺りが、先ほどにも増して輝く。身に着けた衣服の下からでも分かるほどにはつきりと十字と盾のシンボルマークが浮かび上がる。

トラウルは、その男の意志が、遙か北 その天上に位置する北十字、ノーザンクロスに注ぎ込まれ、リンクし、逆の順序を辿ってノーザンクロスの意志が力となって降り注ぐ様をイメージした。そ

れが刻印の力だった。無論、目で見えるものではない。

時間にして数秒にも満たない。

「守護を」

男の呟きの応じて、空気が軽く震えた。男の前面に、不可視の障壁が作られたことが、トラウルにもわかった。さらに、男の、緊張感と興奮が空間に広がり、トラウルはそれをも感じていた。

単なる共感の類ではない。刻印の力を使用する際、辺り一体に使用者の感情や意志が伝播する現象。刻印の力が発揮される前兆として、銃声や拳を振りかぶる音のように消すことの出来ないしるしとして現れる。意識波、祈りの波、感情波などと呼ばれるものだった。

「突入する」

言つて、壁持つ男を先頭に、彼らは走り出した。

扉をトラウルの放り投げた手榴弾 特殊な爆薬の込められた、

対人用というよりは対物用の がばらばらに引き裂いた。

障壁を展開した仲間が突入し、直後に、その障壁に衝撃がいくつも走った。

トラウルともう一人の仲間は男の背後に隠れつつ、ハンドガンを構えて立て続けに撃った。

教会は、さほど広くない。入り口の大扉から反対側の祭壇まで駆け抜ければ物の数秒とかわからないだろう。乱雑に散らばった長椅子のあちこちに敵の気配が感じられた。薄暗い室内で、いくつかの赤い輝きが見えている。

「サザンクロスの刻印 残党め」

トラウルの隣で、銃を片手に持った男が呟いた。障壁でガードし続ける男の陰から飛び出して、そいつもまた刻印を輝かせる。

叫びを上げながら彼はそのまま長椅子の群れに突進していった。

刻印の力を知らぬ者が見れば、ほとんど正気の沙汰ではないと感じるだろう。それはどう見ても単純な突進であり体当たりだったから

だ。

しかし、その速度は尋常ではなかった。刻印の力が、彼の意思に従い彼の背中側の空間を圧縮し押し押しているのだ。同時に、前面には円錐状のシールドを形成している。トラウルにそれは見えるものではなかったが、何度もその仲間が使ってきた突撃方法であり、見慣れたものだったためその意味を十分に理解していた。

空間操作による不可視の槍を展開させた突撃は、見事に敵の一人を刺し貫いた、木製の椅子とともに赤い光が散らばって消え、それとともに気味の悪い音を立てて黒い外套をまとった男が倒れ伏した。

「北の偽善者！」

敵の叫び。

単純な怒りが爆発して伝わってくる。感情波だった。罵声が敵をしとめた男の横合いから飛び、一瞬で赤い光が伸びた。熱を帯びた粒子線のような一筋の光条が、突進した男を横から貫通した。光線が消えると、仲間の男はすぐに倒れ伏した。

椅子の影に隠れたその赤い刻印を持つ敵に向かって、トラウルは弾丸を素早く叩き込んだ。椅子の表面に弾痕が穿たれ、数発分の弾が貫通する。命中したことを示す、くぐもった叫びが聞こえた。

「よくもっ」

声とともに更に敵が現れる。皺の多い顔が特徴的な、ローブを身につけた男が厳しい表情でトラウルと仲間を睨み、片手を上げた。

凄まじい刻印の力がうねっていた。敵の男の腹の辺りが禍々しく赤く輝いている。十字架に二本の剣を重ねたシンボル　サザンクロス刻印だった。それが、力を発揮する。その一瞬前に、黒々しい、恐怖と怒りの混合された感情の波が広がり伝わってくる。

咄嗟にトラウルは障壁の影に隠れ、障壁を維持する仲間はその壁に更に力をこめた。

空気が炸裂し、爆発が起こった。空間の一部が圧縮され、それが急激に元に戻る際のエネルギーが、周囲の空気を巻き込んで破裂したのだ。

刻印によつて作られたシールドが破れ消え、仲間の男が爆圧に
たずたにされる。もんどりうつて倒れようとするその仲間を、背後
からトラウルは支えた。

助ける為ではない。トラウルが触れたときには既に彼は死んでい
た。背中側からでも分かる、体のあちこちにどうあつても元には戻
らない大きな傷が出来ていた。

迷わずトラウルは、その仲間だった男の背に銃口を当てた。大口
径のオートマチックを、立て続けに発砲する。

薄い油膜のようにやすやすと弾丸は背中を貫通した。そして目論
見通り、その向こう側にいる敵へと襲い掛かる。

無言で、トラウルは背中から腕をどけた。仲間の体が倒れる音と、
敵が床に転がる音が同時に一つの音として響いた。

壊れかけの、古く暗い教会の中に、ひと時静寂が戻った。厳粛で
ありながら退廃しきつた情景の中、立っているのはトラウル一人だ
った。

0 プロローグ・3

静寂。まるで自分以外の誰も死に絶えたかのような。

(いや)

顔を上げて、祭壇を見やる。教会の最も奥、神聖なはずのその場所に、一人の少女が立っていた。

じつとトラウルを見つめている。吸い込まれそうになる、透き通った瞳。

あまりにも 痛々しいほどに無垢な、少女の姿。埃と血にまみれた戦場の中、教会の廃墟の中にあつて、不自然極まりない、美しく汚れない姿。

黒く長い髪が明り取りの塔から差し込む僅かな光を反射してきらきらと輝いている。病的に白い肌と、細い手足が少女の持つ儂い雰囲気を助長している。年齢は、まだ十にとどいてもいないだろう。背はトラウルの胸ほどもない。

「サザンクロス信奉者達の、聖女……」

低い声で、トラウルは呟いた。少女は瞬きすら忘れたように、ひたすら無表情のまま彼を瞳に映し込んでいた。

銃を手に持ったまま、近寄る。少女は後ずさりもせず、声も上げず、じつと立ち尽くしている。戦闘訓練も受けていない、ただの少女。トラウルの脳裏に、この少女が戦闘に関しては素人だという情報浮かんだ。同時に、彼女が持つ刻印の力だけは、敵 サザンクロスの信徒たちがこぞつて崇めるに相応しいものを持つという事実も。

それらが消えて、次にイメージとして現れたのは、かつてのパートナーの記憶だった。

背中を合わせて、共に戦った。互いの声を何より信じ、生き抜いた。厳しい争いの中、彼女との生活だけが、触れ合う一瞬だけが、

自らにとつての全てだった……

喪ったもの。喪った全て。サザンクロスの信徒達に殺された、全て。

トラウルの中には、激しい怒りの燃え滓と、巨大な虚無感だけがあった。怒りに任せて戦い続けたその終点が、今ここなのだ。トラウルは、自分が闘いへの意志さえ既に失いかけていることを悟った。「ユキ……」

知らず、その名が口から零れた。その声に反応するようにして、少女が小さく口を開いた。

「あなたは誰？ どうして、皆を殺したの？」

サザンクロス信者のことを言っているのだろう。無視して、トラウルは銃口を少女の胸の辺りに押し付けた。

どうして殺した？ どうして戦った？ どうして生き延び続けた？ なぜ、どうして。

答えなど、あるはずもなかった。ただ、空虚さがあるだけだった。「おれには……何も無い」
搾り出すように、それだけを言った。

そして、少女の瞳を、自らも覗き込んだ。傷のない、綺麗な瞳。空虚な自分の瞳とはまるで違う。それは、どこかで見たことのある瞳だ。そのことに気がつく。

(ああ……)
すぐに思い当たる。汚れも傷もない、美しい色。これからどんな色でもそこに映しこめるであろう、正しく、イノセンスな瞳。

それは、彼が喪った、彼の愛した人々のそれであった。

「どうして」
またも、少女が声を発した。瞳と同じく、透明感が詰まった美しい声だった。

彼女は、小さな手の平を差し出して、トラウルの頬に触れた。トラウルの体が、びくりと震えた。何を恐れたのかは分からなかったが、ひどい恐怖が、トラウルの身体を駆け抜けた。目の前の少女の

刻印の力？ サザンクロスの聖女という存在？ そうではない、もつと違う種類の何かに対してのおびえだった。

その何かが、少女の唇から言葉として伝えられる。

「どうして、泣いているの？」

泣いている……？

トラウルは、自らの頬の感覚に、愕然とした。

引き攣り、震え、濡れている。

多くの声が脳裏を過ぎった。他愛ない笑い声、枯れた悲鳴、いつまでも引きずられる呻き声。喪われた声がぐるぐると心の中を回り始めた。

グリップを握る手のひらが、指が、萎えかけていた。力が抜け、震えだけが残されていく。

(もう駄目だ)

理解する。

(俺は、もう)

怒りで敵を殺すことさえ、出来そうにない。残された空虚さだけで、自分が構成されていることを悟る。敵を殺しつくす為に、命も魂も捧げるといふ、それまでの思いはほとんど消えていた。捧げる物など、自分にあるのか。捧げる先など、残されているのか。

何をすることも、もう出来ない。

(ユキ……)

目の前の少女は、何も自覚していない。この戦いがどのようなものかも、人が死んでいくことの意味も、自分がどのような立ち位置にいるのかも。ただ、サザンクロスを信ずる人々の求めに応じただけなのだろう。罪悪感も正義感も含まれていない、生まれたての子のような表情がそれを物語っている。

最後の激情が、トラウルの元へと降りてきた。

何もかも。自分も、他人も、喪われず残った全てが、消えてしまえという、強烈な思い。

何も意味はない。聖女を殺しても、サザンクロス信者を殺しつく

しても、あるいは世界を救おうと滅ぼそうと、何も意味はない。喪
いきった自分には、もう何も無い。

耐え難かった。トラウルは、はつきりと涙を流しながら、叫びを
上げた。

おお、おお、おお………！

胸に当てた銃が跳ね、少女がその場に倒れた。罪を意識すること
すら出来ていない少女を撃って、しばらく呆けたように宙を見つめ
続けた後、トラウルは思い出したかのように、銃口を自らに向けた。
自分の空っぽさが、恐らく世界で最も醜悪だろうと、そう思って、
彼は引き金にかかった指に力をこめた。

1 彷徨う信心の果てるどころ・1

1 彷徨う信心の果てるどころ

信心は、刻印に光として宿る。刻印が持つその光は、天より与えられる大いなる力を自在に操ることが出来る、その証となる。

トラウルは、少なくともここ五年近く、僅かな光の欠片さえ発していない己の刻印に目を向けた。右手の甲に刻み込まれた刻印は、細い針で刻み込んだ傷跡のような黒いラインによつて構成されている。

「北の神聖なる十字星、ノーザンクロスは、かつて南の大いなる存在、サザンクロスと共に、人々を導いていました」

病的に白く綺麗な壁紙に包まれた部屋の中で、トラウルは大勢の新人たちとともに椅子に腰掛け、説教を聞いていた。何度聞いたか分からない話をだらだらと聞かされる、退屈この上ない時間だが、退出するわけには行かなかった。なにせ今トラウルがいる部屋はれつきとした十字軍の一施設であり、つまらない説教を聞くということもまた、れつきとした軍の指令の一つであつたからだ。

金属と樹脂で出来た安っぽい椅子がずらりと並んだ部屋の最前、一段床が高くなつた場所で、『北十字聖府』お抱えの『信仰教師』が、言葉を続ける。

「人類は遠い過去、その力を際限なく増大させ、大地を機械で埋め尽くし、この惑星を飛び出し天の虚空に機械の住居を築き、大いなる繁栄を遂げていました。が、情報として蓄積され進化を続ける文明、科学技術が輝きを強める一方で、個々人が感じ考えることでしか獲得されえぬ、蓄積や伝達の難しいもの。正しさを志向し善に生きる為の知性や倫理といったものは、さほど大きな変化を遂げませんでした」

教師の背後の壁に、いくつかの映像が天井から吊られているプロジェクターによって映し出される。どれも、破壊された街と思しきものの映像だった。天まで届きそうなビルの群れ、実際に天に届き星の外まで伸びている軌道エレベーター。宇宙空間に建設された居住施設群に、海底のドーム型娯楽施設。そのどれもが、無残に引き裂かれ、黒煙を上げたり内部構造を剥き出しにしている。

「幼子にでも分かるであろう シンプルな結果。高度な文明と肥大した人口、複雑化を続けた数々の思想、そして変わらなかった倫理。人類は絶頂期に到達し、その後すぐに戦乱へと突入しました」
現在ではほとんど魔法に近い、凄まじい文明の力。それを存分に振るった世界規模での戦争。殖民惑星が砕け散り、宇宙に浮かぶ居住コロニーがウィルスで満たされ、母星の大気の上を馬鹿馬鹿しいほど多種多様な兵器が飛び回った。

六十億を超える人命の喪失があったのだという。世界人口が十億に満たない世界で生まれ育ったトラウルたちには、全く現実味の無い話だった。

「人類は深く悔いた と同時に、自分達の愚かさを自覚し、それが容易には矯正できないことを認めました」

子供に聞かせるような口調でゆっくり喋る教師に、トラウルは小さく嘆息した。と、その嘆息を聞きとがめたものがいた。

「hey、hey、真面目に聞いてないと刻印パワーがいつまで経っても取り戻せねえぜ? 『無宗教』のトラウルさんよ」

トラウルは、ちらりと自分の左腕を見た。数年前仕事中にひどい損傷を負った生の腕の代わりに取り付けられた機械の腕。今はなき文明 ちょうど今話されている、遙か過去の人類が生み出した遺産の一つだ。

その腕の手首辺り、入り組んだ機構のどこかに存在する音声出力機関から、小さな声がしていた。落ち着きの無い、背伸びした青年のような声だった。

「銃器だの失われた文明だのに頼って戦う肉体派、このむっつり軍

人野郎。刻印の使い手だらけの部隊内で、孤立していじめられたつてしらねーぞ」

「退屈になったか、ラープ」

ラープと呼ばれた、機械の腕の中にいる『何か』は、へ、つと鼻息のような音を漏らした。経験上トラウルは、この悪態つきの腕が自分をわけもなく擲擄する時は、退屈さに耐え切れなくなったときなのだを知っていた。

『聞き飽きたよ、うんざりだ。こんな話ガキだつて街の教会で三日に一度は聞いている。あほらしい』

全くそれには同感だったが、ここで騒がれて教師の叱責を受ければ、あるいは十字軍の上層から評価を下げられれば、困ったことになる。トラウルは生身のままの右手で左腕を押さえつけた。

「黙っている。これも仕事だ」

小声で告げて、静寂を取り戻す。

「南北の大きいなる十字。人は、善悪を判断し、正しい行為や選択を、自分達の半端な知性の代わりに行ってくれる存在を求め、作り上げました。」

人のつくりし偉大な知性、人類の導き手にして、我々に力を与えてくださる天上の思考存在。ノーザンクロスとサザンクロスと呼ばれる、人造の神ともいえる超知性が、戦乱の後生き残った人類によって宙に上げられました」

教師の首筋に見える盾の紋章の刻印が、薄らと輝いている。自分の話に興が乗ってきたのだろう。無意識に北十字への信仰心が増しているのだ。

「以降、人々は南北十字の庇護の下、争いを繰り返すことも悲劇的な歴史を新たに積み重ねることもなく、自ら規制した文明の中で穏やかに生活していました。」

あの忌まわしき厄災、サザンクロスの降下によって南半球が赤く塗り替えられるまでは」

壁の映像が切り替わる。南半球が赤く色づけされた地球の映像。

大気の青が遙か過去より続く北半球と、不自然なほどに赤く染まった南半球のコントラストは、惑星としては言うまでもなく異常な見た目である。どことなく、二色の着色料で色づけされた、子供用の飴玉のようだった。

南極の中心には、小さな十字架が斜めに突き立っている。

「サザンクロスは地表に激突し、甚大な被害を我々の住む星に与えました。単純な衝突のエネルギーだけが撒き散らされたのではなく、このとき、サザンクロスは地表に自らの力を恐ろしい勢いで放出し、大洋を沸騰させ、空気を燃やし、生き物を支配しました」

険しい表情で語る教師とは裏腹に、トラウルの周りの新人たちも、トラウルと同じように退屈さを滲ませていた。

無理もない、とトラウルは感じた。

皆、軍人としての仕事のために刻印とノーザンクロスへの理解を深めよと命じられて集められている。長々と聞き飽きた昔話をされては、いかに熱心な北十字信仰者とはいえ眠気やだるさを感じてしまふのだろう。

「元々北十字ノーザンクロスと南十字サザンクロスは二つで一つ、一心同体の存在であつたとされています。北十字は善を保護し守る為の力を持ち、南十字は悪を排斥し攻撃する為の力を持つ。そして二つともが、善悪判断の為の高い思考力を持つ。両者が合わさって人類を善に導き、平和な暮らしを続けさせていたのです」

その平和が、トラウルが十歳になつた辺りまで続いた。「なぜ、どうして、サザンクロスが人を支配し滅ぼそうとしたのか。そしてサザンクロスと一体であつたはずのノーザンクロスがそれに反発し、サザンクロスの力を赤道で押し留めたのか。世界中の信徒達が、今もその答えを知らず、悩み、生きています」

一旦言葉を切り、教師は黙って座っているトラウルたち説教相手を見回した。

「しかし、大事な事実は既に揃っています。サザンクロスは人類にその力を向けました。そしてノーザンクロスはそれに対抗しました。

地表の半分を犯したサザンクロスこそが、狂った存在であると、我々はそのことを疑問を抱かず納得できることでしよう」

「分かったもんじゃねえよな、そんなこと」

ラープが口を挟むが、勿論誰もそれには気がつかない。

「我々は北十字の信徒。青き刻印は、ノーザンクロスの力を借りるためのものです。ノーザンクロスとは、サザンクロスが狂った今、唯一残った『善』を司る超知性であり、我々が崇めるべき存在です。刻印の力を充分以上に発揮したいのならば、ここにいる皆さんは、今以上にノーザンクロスの気配を感じ、その教えに耳を傾け、北十字が示す「正義」への理解を深めなければなりません。そうすればこそ、刻印の力を強く引き出し行使できるのです」

刻印能力を持つ人間が軍人として活躍する上で、刻印の力は任務と切り離せない。文明が決定的に崩壊しかけた現在、刻印は最も強力な武器だからだ。

刻印は南北十字という大いなる存在にアクセスし、力を借りるためのものであり、そのためには『偉大な十字』をよく知る必要がある。刻印の力の強さ、刻印への親和性とは即ち南北十字への親和性に他ならない。

つまり、軍人にとって、仕事とノーザンクロス信仰は切り離せない一つの物である。

(そのせいで、こんなところでつまらん話に耳を傾けねばならない…… 十字軍にあつて異端である、俺でさえも)

刻印の使えない、特殊な兵士。それがトラウルだった。彼を管理する組織の上層は、度々彼の刻印の力を復活させようと、こうして新人向けの『講習会』にトラウルを出席させる。

「ノーザンクロスこそが善を知り、サザンクロスこそが狂気を宿してしまった裏切り者である。それは自明です。

北十字を崇め、信じなさい。それが、優秀な十字軍の一員となる近道です」

締めくくるその言葉に、トラウルは無表情のまま、僅かに眉間に

皺を寄せた。ラープはげらげらと笑っていた。小さな声で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6427v/>

喪失と罪のアウフヘーベン

2011年8月10日03時16分発行